

論文の和文要旨

論文題目 日本語学校生の学習動機および自己形成の時間的変遷
—「期待価値理論」を援用して—

氏名 岡 葉子

教育とは、学習者に知識を伝達するのみではなく、学習者に内在する能力や関心、意欲を引き出すことである。同時に、学習者が自ら考え行動する過程を見守り、場合によっては適切に介入することも、教育に携わる者に必要な行動である。

学習動機が教育において注目されるのは、何をどのように学習するべきなのか自ら考え行動するという、学習者の主体性が学校教育の課題として挙げられるようになったからである。第二言語教育においても例外ではなく、学習動機は学習を開始する際の「機動力」であり、長い学習プロセスを継続させるための「推進力」でもあると言われている。

2008年に日本政府は、日本を世界により開かれた国とすることを目指し、世界との間のヒト、モノ、カネ、情報の流れを拡大する「グローバル戦略」を展開する一環として、2020年を目途に留学生受け入れ30万人を目指す「留学生30万人計画」を打ち出した。実現可能性や適切さについては様々な懸念が示されているが、留学生の存在は、日本社会にとって今後より一層重要になってくると言えよう。

日本学生支援機構によれば、平成28年度5月時点の留学生総数は239,287人であり、そのうち日本語教育機関の学生数は68,165人である。つまり、全留学生のおよそ3人に1人は日本語学校に所属しており、この割合は決して小さくないと言える。およそ7割の学生が進学していることから、日本語学校生の存在は留学生教育を語るうえで欠かすことができないと言えよう。それにも関わらず、日本語学校生は注目されることがほとんどなく、先行研究の少なさが指摘されている。

では、日本語学校生とはどのような学習者なのだろうか。彼らのほとんどは10代後半から20代前半の若者で、私費留学生である。彼らは最大2年という限られた期間の中で、自分の進路に見合った成果を出さなければならない立場にあり、逆に言えば進路が決まるまでは社会的に不安定な状態にあると言える。実際、日本語学校生は大学での留学生に比べ、抑うつなどの不安定な心理状態に陥りやすいことが報告されている。

先行研究においても、学習者の抱える問題点を明らかにする研究、あるいは、問題点に対する改善やサポートの必要性について言及した研究がほとんどである。逆に言えば、問題を抱えているとみなされていない学習者が調査対象となることはほとんどなかったのである。だが、学習動機の「学習プロセスを継続させるための推進力」という側面を見るためには、大学生に比べてより困難な状況にありながらも学習を継続していく大多数の日本語学校生にも注目するべきではないだろうか。

そこで、筆者は、学習の継続性に注目し、大規模な質問紙調査を用いて日本語学校生の学習動機を分析する。また、インタビュー調査も行うことにより、より具体的かつ詳細な分析を行うことを試みる。その際には、以下の2点を留意する。

第一に、従来の学習動機研究において注目されてきた内発的動機や自己効力感以外に、学習動機を支える要因にはどのようなものがあるのか、明らかにすることである。なぜなら、日本語学校のような予備教育機関では、日本語学習は「楽しくないからやめる」という選択肢が取りにくいからである。また、1-2年という比較的長い時間の中で、学習への興味や自らの能力への自信を喪失することも大いにありうると考えるためである。すなわち、日本語学校生が内発的動機や自己効力感を失いながらも学習を続けていかなければならない状況にあるとしたら、それを説明する学習動機要因を探りたい。

第二に、学習動機を自己形成との関連の中で捉えることである。なぜなら、日本語学校生の多くが10代後半から20代前半までの若者で、いわゆる青年期の自己形成の構築過程にあるからである。さらに、彼らの場合は、日本留学に伴って周囲の環境が変化することにより、これまで築いてきた自己像を新たに構築しなければならないという課題にも直面するためである。

以上の二点に留意し、日本語学校生の学習動機を継続性という視点から分析することにより、日本語学校生が日本留学や日本語学習にどのような意義を見出しているのか、日本社会における自己をいかに認識しているのか、それが時間の変遷とともにどう変化していくのか、明らかにできるだろう。そうすることで、学習者に内在する能力や意欲を教師がいかに引き出せばよいのか、議論することが可能になるだろう。

学習動機の分析には、認知論的アプローチの一つである期待価値理論 (Eccles & Wigfield 1995, Wigfield & Eccles 2000 など) を用いる。期待価値理論とは、学習動機を自己に対する「期待」と、学習に対する「価値」の二面から捉えようとするものである。すなわち、タスクがうまくできるだろうという結果に関する「期待」と、興味、実用性、コストといったタスク自体に関する主観的な「価値」の認識が、タスクの遂行や持続性に直接影響を及ぼすという理論である。期待価値理論によれば、「期待」

と「価値」の意識の背景には、文化環境や個人の経験によって形成される自己スキーマがあり、それらが学習者の意識に影響を与えている。つまり、「期待」と「価値」は文化社会的な文脈の中で形成されるのである。

本研究の目的は、第一に、日本語学校生の日本語学習動機を構成する因子は何か、明らかにすることである。第二に、異文化における自己形成を構築するという過程が、学習動機にどのような影響を与えているのか、検証することである。第三に、学習動機および自己形成が、環境との相互作用の中で、時間と共にどのように変化していくのか、考察することである。以下に、各章の概要を述べる。

第2章では、**motivation** という用語の訳語が、第二言語教育および日本語教育の研究者の間で共通概念がないことを指摘し、日本語教育における主な学習動機研究で用いられている訳語とその定義を整理した。その結果、教育心理学→第二言語教育→日本語教育と進むにつれて定義がより複雑になっていること、同じ用語を用いても定義が異なるケースも多く、単純に類型化することは不可能であることが明らかになった。そのため、こうした用語の曖昧さを克服するためには、今後は各研究者が明確な定義づけを行うことが必要であることを述べた。

第3章では、日本語教育における学習動機研究について、時系列に研究動向を述べ、近年は、研究アプローチおよび研究方法が多岐に渡っていることを示した。その上で、第二言語教育学独自の理論に基づく研究、教育心理学の理論を援用した研究、社会学の理論を援用した研究の3つの研究アプローチ別に先行研究を整理した。先行研究の課題として、学習動機研究その全体像が研究者の間に共有されていない点を指摘し、様々な理論の連続性や重なりにも注意する必要があることを述べた。また、学習動機の要因として内発的動機や自己効力感が注目されているが、研究対象者によっては、それ以外の要因にも目を向けるべきであることを指摘した。

第4章では、本研究で援用した期待価値理論と、本研究の理論の枠組みについて述べた。期待価値理論は、学習動機が自らの能力や結果に対する「期待」と、学習そのものの意義にあたる「価値」の二つの側面から構成されるという理論であり、時間の経過と共に学習動機が低下する現象やジェンダー意識の異なりによる学習行動の相違を説明する理論である。Eccles & Wigfield (1995) は、「期待」と「価値」に加えて、「学習困難」意識を含めた尺度を示しているため、困難な環境の中でも学習行動を維持していくメカニズムを解明するため、使用することにした。

第5章と第6章は、406名を対象に実施した質問紙調査の結果を提示した。第5章では、期待価値理論を日本語学習者の学習動機に援用した結果、これまで個別に扱われる

ことの多かった学習動機の因子間の関係が明らかになった。「獲得価値」と「利用価値」が同一視されたことから、言語の獲得と利用の一体化という言語学習の特徴が明らかになった。「努力肯定」は、「学習困難」と正の相関を持つ一方で、「利用獲得価値」及び「内発的価値」とも正の相関を持つことがわかった。また、学習時間に対して「学習困難」も正の影響を及ぼすことから、「学習困難」意識は必ずしも排除すべき意識ではないことが分かった。

第6章では、学習動機と自己形成の間には関連があり、在籍期間が長くなると値が低くなる因子が存在することが分かった。学習動機因子においては、「内発的価値」「能力期待」「努力肯定」の低下が見られ、自己形成においては心理社会的同一性の低下みられた。このことは、日本語学校生が異文化の中で自己を構築することが困難であり、同時に学習動機も低下することを示している。先行研究で注目されている内発的動機および自己効力感と構成概念が類似する「内発的価値」および「能力期待」は、時間の影響を受けやすいこと、特に在籍1年以上の学生にその傾向が顕著であることが分かった。また、「能力期待」は「心理社会的同一性」から影響を受ける可能性と在籍期間が6-10か月の男子学生においてのみ有意に値が高くなることが示された。以上のことから、教育現場では、在籍期間が長い学生に目を配ること、クラス環境を整えることで学習者の能力期待に働きかけることが有効であると考えられる。

第7章では、4名の対象者にインタビュー調査を行った結果、学習が進むと「学習困難」意識が高まること、学習環境如何では「能力期待」の値が上下することが明らかになった。「能力期待」に関しては、質問紙調査の結果からも「心理社会的同一性」の影響を受ける可能性が示されていたが、さらにそれがクラス内の人間関係に起因することが個別の事例において報告された。クラス内の人間関係とは、クラスメイトの関係が良好に築ける（あるいは築けない）ということだけではなく、年齢や出身国構成による位置取りにも関係し、4名とも何らかの形でマイノリティ意識を経験していた。だが、自ら行動を起こすことでクラスの中での人間関係が構築され、それが自己形成及び学習動機を高める事例も報告された。

今日のようにインターネット技術が発達し、自律学習ツールが普及した時代において、なぜ留学生は日本へ空間移動をし、教室の中で学ぶのだろうか。それは、クラスメイトおよび教師とともに学ぶためだろう。たとえ、それが短い限られた時間であったとしても、学習動機の向上や低下を経験しつつ、新しい自己を作り上げていく際に、日本語の教室および日本語学校は少なからぬ存在意義があると考えられる。